

教職課程年報創刊にあたって

—教員養成課程を担当しての雑感—

別府さおり（八千代キャンパス教職課程専門委員長）

平成 27 年の中央教育審議会答申に続き、平成 29 年には「教職課程コアカリキュラム作成の背景と考え方（案）」が文部科学省から示され、教員養成に関する改革の具体的な方向性が示されました。大学の教員養成は、今まさに変革期にあります。

本学の教職課程年報創刊にあたり、今後の教員養成に必要なことは何かについて、教員養成課程を担当する者として雑感を述べたいと思います。

今般、障害のある子もない子も可能な限り共に学ぶことを目指し、インクルーシブ教育システム構築に向けた特別支援教育が推進され、交流及び共同学習などの取組に力が入れられています。こういった動向について学び、実践できるようにしていくのはもちろんですが、我が国では、通常教育と特別支援教育の二分法に基づいた教育システムが展開されてきた歴史があり、教員養成もその仕組みの中で行われていることを、どの校種の教師を目指す学生にも自覚してもらう必要があるでしょう。

これから、教職課程コアカリキュラムにおいて、特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解に関する科目が必修になります。教員自身が、多様な価値観、多様な人を受け入れることにつながるでしょうか。

また、教育界においても **evidence based** が求められるようになり、実践でも研究でも、目に見える子どもの言動や数値で評価、説明できるものが重視されるようになりました。しかし、教育現場では、多様な要因がダイナミックに相互作用しながら日々教育活動が展開されています。

教育活動における事象を客観的に把握し、記述し分析することは重要であり、教師になるにあたって身に付けてほしい力量です。他方、教師は目には見えない、または見えにくいもの—子どもの思いや願い、心の機微—に触れ、理解しようとし、時には巻き込まれながら教育活動に邁進しているのではないのでしょうか。「教師である私」と「固有名詞のある子ども」との間で起きる、確かに通じ合ったという感覚。こういったものは主観とされ軽視されがちかもしれませんが、切り捨てることはできません。主観と客観が相互に影響し合い螺旋状に伸びていくことが、教師の力量形成として重要な側面であるように思います。

課題山積で正解が出ないことも多いからこそ、教育に携わる一人一人が考えることが大事なのでしょう。この教職課程年報が、教育についての幅広い取組を公表する機会となるとともに、皆様のお目に触れました折には活発な議論の端緒となれば幸いに存じます。

最後になりますが、教職課程年報の創刊に際しご尽力いただきました多くの方々に心より感謝申し上げます。